

熱帯雨林の大火災

スマトラ島やカリマンタン島の熱帯雨林で大規模な森林火災が発生、それも二カ月以上も燃え続けている」というニュースを聞いて耳を疑った。年間降雨量が四〇〇〇ミリとか六〇〇〇ミリの熱帯のジャングルの世界でスコルの襲来で一年中雨が降っていると思っていた。

大火災による濃い煙が海を越えて隣国マレーシアまで襲っている画面をみせられ大変な事態に進んでいると実感した。これまでの大森林火災は一九八八年のアメリカ大陸のイエローストーン国立公園の森林火災や大興安嶺、昨年のモンゴル草原の大火災といったように、いずれも中緯度の内陸の乾燥地帯であった。火災が続いているインドネシアは、七月初ころから二カ月以上も本格的な雨が降らない異常気象が続いて

いた。

この原因は今世紀最大規模に発達したエルニーニョ現象によるといわれている。例年なら北東貿易風で太平洋西部に暖かい海水が吹き寄せられ、インドネシアからニュギニヤにかけて対流雲が発達してスコルの雨が降るが、今年は貿易風が弱まり、逆に暖かい海水が太平洋東部、ペルー沖から中部赤道太平洋海域に移って雨に見放されてしまった。

東南アジアは十月に入ると雨季が明瞭となり十二月までとりわけ十一月が五百ミリ前後の年間で最も大雨の時期となる。期待の雨季入りも頑固なエルニーニョで遅れ気味となっており、泥炭層にも燃え移って地中でくすぶっている現状では、本格的な雨季の雨による消火の道しが残されていない。

一九八八年のイエローストーンの森林大火災では公園の半分、

東京都の二倍の面積を焼き尽くした。自然を傷つける消火が必要か否かの大論争があったが、結局二月間燃え続けて消えた。あれから九年、焼け跡からは若木が育ち、自然の巧みな仕組みをもった回復能力で森の再生が人の手をかけずに進んでいる。

インドネシアの森林火災の原因は、プランテーション造りの大規模な熱帯雨林の伐採と焼畑によるものといわれ、鎮火したあとも伐採と焼畑は続けられよう。炭酸ガスの大きな吸収源である熱帯雨林が大規模に消えつつある現実を衆目に晒らした今度の森林大火災は、地球温暖化防止より人口爆発とともに進む経済発展を選択せざるえない国々の現実の難しさを、異常気象が浮かび上がらせたのではなからうか。